

上 石炭屋 渡辺福三郎  
神奈川県立博物館蔵  
『横浜諸会社諸商店之図』より



左 明治初期の石炭屋の経営記録  
「上方茶仕切帳」と  
「外国人売込控帳」  
(三丸興業株式会社寄託文書)

# 開港ひろば

YOKOHAMA ARCHIVES OF HISTORY NEWS

編集・発行／横浜開港資料館（財横浜開港資料普及協会）  
横浜市中区日本大通3番地 TEL 231 電話(045)201-2100  
発行日／平成7年2月1日  
印 刷／株式会社 佐藤印刷所

## 館蔵資料展 「横浜の近代パートII」

### 石炭屋 渡辺福三郎商店関係資料の公開

横浜開港資料館では、毎年多くの方々からの資料の寄贈・寄託をうけている。館蔵資料展

「横浜の近代」は、そのような当館収蔵資料のなかから、各時代に特徴的なものを選び、全体として近代横浜の歩みが読み取れるよう配列した展示であり、

今年度第一回のパートIIにつづいて、今回パートIIを企画する。さて、近代横浜の主役は、横浜商人であったと言つても過言ではない。一〇〇戸たらずの農漁村であった横浜は、幕末には開港場となり、全国第一の貿易港と

して急成長した。その貿易の担い手となつたのが、横浜商人である。

横浜商人はその財力をもって、横浜の政治や社会事業などに大きな役割をはたしたが、中央財

渡辺福三郎は、江戸商人日本橋本材町の海産物商明石屋渡辺家の出身である。渡辺家は横浜開港とともに進出し、磐城現

渡辺福三郎は、江戸商人日本橋本材町の海産物商明石屋渡辺家の出身である。渡辺家は横浜開港とともに進出し、磐城現

福島県いわき市）の片寄平蔵とともに海産物・石炭生糸の売込を開始した。当時の史料では店は「明石屋平蔵」と記録されている。文久二年（一八六二）に福三郎は七歳で横浜店を継ぎ、そこには明石屋横浜店は石炭屋へと店名を改称している。慶応元年（一八六五）下半期の売上金額は七万両にまでおよび、大

規模な取引を開拓している。明石屋から石炭屋へと改称されたものの、福三郎の石炭取扱は急速に減少していった。以

来資本の勢力伸張や大正後期からの不況・恐慌・震災・戦災・戦後の占領などで打撃をうけて、多くの人が横浜の表舞台から去つていった。わずかに残った横浜商人の末裔も、貿易商業からは退き、不動産経営などを主たる業として現在にいたっている。

横浜商人は、個人経営的色合が濃厚なうえに、震災・戦災などでその資料はほとんどが失われているのが実情である。ただ一つといつてよい例外が、石炭屋渡辺福三郎商店である。

渡辺福三郎は、江戸商人日本橋本材町の海産物商明石屋渡辺家の出身である。渡辺家は横浜開港とともに進出し、磐城現

幕末～明治期の石炭屋・渡辺商店の商業・不動産経営にかかるものが主であり、それらは高村直助氏によつて、明治前期にかけての分析がなされている。「幕末・明治前期における売込商石炭屋の経営形態」『横浜市史補巻』所収。当該文書は横浜市が渡辺商店の後身である三丸興業株式会社から借用し、整理を終えて、横浜開港資料館において蔵蔵されていたが、このたび同社のご理解により、公開されることとなつた（一部非公開）。

この史料群がさらに詳細な分析が加えられ、横浜商人の動向をさぐるものとして活用されると期待したい。（平野正裕）

福三郎のもつとも大きな取引は明石屋以来の海産物であった。福三郎は函館（北海道）や常陸（茨城）の荷主や東京の明石屋から集荷し、干鮑・干鰯・棒鰐などを中国人商人などに盛んに売り込んだ。海産物は当時の生糸茶に比較して輸出額は少ないものの、福三郎は明治十一年（一八七八）四月から二月までに、七万三千円以上を売り込み、横浜商人の代表格の人となつていた。明治二二年には福三郎は若干十四歳で本町外十三か町の町会議員に選出されている。福三郎が残した文書・記録は、横浜商人の代表格の人となつていた。明治二二年には福三郎は若干十四歳で本町外十三か町の町会議員、一四年には神奈川県会議員に選出されている。

福三郎の最も大きな取引は明石屋以来の海産物であった。

福三郎は函館（北海道）や常陸（茨城）の荷主や東京の明石屋から集荷し、干鮑・干鰯・棒鰐などを中国人商人などに盛んに

売り込んだ。海産物は当時の生糸茶に比較して輸出額は少ないものの、福三郎は明治十一年（一八七八）四月から二月までに、七万三千円以上を売り込み、横浜商人の代表格の人となつていた。明治二二年には福三郎は若干十四歳で本町外十三か町の町会議員に選出されている。

福三郎が残した文書・記録は、横浜商人の代表格の人となつていた。明治二二年には福三郎は若干十四歳で本町外十三か町の町会議員、一四年には神奈川県会議員に選出されている。

福三郎の最も大きな取引は明石屋以来の海産物であった。

## 館蔵資料展

# 「横浜の近代 パートⅡ」から

今回の展示は、昨年開催して好評を得た館蔵資料展「横浜の近代 パートⅠ」の基本的骨組みを生かしながら、これまで日の目を見ることがなかつた資料や最新の収集資料をふんだんに盛り込んでいる。そのいくつかを紹介しよう。

### ◆ 横浜貿易商青年会会誌



横浜貿易商青年会会誌 第一号  
五味文庫所蔵

これまでの、近代青年集団史研究はもっぱら農村青年にむかっており、都市青年についてはほとんど解明されていない。それでも都市に青年会があることは指摘され、横浜でも震災後の関内で、各町ごとに青年会が発足していない。横浜貿易商青年会は明治二〇年代の商權回復運動に積極的に取り組み、その尖兵となつた青年会である。横浜雑貨商青年協会を前身とし、商權回復の理論的指導者である前田正名の影響をうけて、タスカ商会事件（明治二十四年）、サミュエルサミュエル商会・セレス商会事件（二六年）、南京口錢全廢運動（二七八年）など（詳細は『横浜市史 第三卷下』）に関与した。有力貿易商の多くが賛助し、商業の諸学科を学ぶ夜学（英和学部）・付属音楽部の運営、遠足運動会などもおこない、この青年会の歴史については稿をあらためて論述したい。

（平野正裕）

連合会「關内青年團連盟」が設立されている。商業・同業組合の青年たちが青年会を組織することもあり、横浜取引所に関与する青年たちが「横浜丸仲青年会」を組織し、横浜魚市場青年会の存在を確認することもできる。しかしそれらの青年会は、親睦修養団体としての活動が主で、昭和四年の横浜市電争議のおりに、關内の青年が市電を自主運行したというぐらいうが、時勢の表舞台に出た事例といえようか。

横浜貿易商青年会は明治二〇年代の商權回復運動に積極的に取り組み、その尖兵となつた青年会である。横浜雑貨商青年協会を前身とし、商權回復の理論的指導者である前田正名の影響をうけて、タスカ商会事件（明治二十四年）、サミュエルサミュエル商会・セレス商会事件（二六年）、南京口錢全廢運動（二七八年）など（詳細は『横浜市史 第三卷下』）に関与した。有

旅行免状の交付とその取り扱いは概して緩やかなものであったようであつた例もあり、記者（主人公）はその顛末をユーモアたっぷりにえがいている。

主人公（外国人の私）はある富士登山に出かける。（図左上から右へ）  
①「サヨナラ」—富士山への途中で。  
②私のパスポートとはじめての富士山全容。  
③サスペンス—「パスポートは大丈夫だろうか？」  
④夜、宿屋の主人と祝杯。（中段左から）  
⑤真夜中—パ

### ◆『グラフィック』誌の記事 「富士登山挫折」

今回、ロンドンの週刊誌『グラフィック』誌の挿絵記事二点を展示している。いずれも横浜の外国人居留地の生活を題材としたもので、ここに紹介するのは一八九〇年（明治二十三）一月四日号に掲載された「富士登山挫折」。

以前には、外国人は開港場の一〇里四方の遊歩区域外へは自由に旅行することができなかつた。しかし国内旅行の要望は当初からあり、政府は明治七年に旅行許可制度を整備して、八年に旅行免状制度を整備して、学術・療養のための「旅行免狀」（パスポート）を発給することにしたのである。



『グラフィック』 1890年1月4日号

ちなみに、この記事の前年の一〇月一二日号の『絵入りロンドンニュース』紙には、同紙の通信員ら一行が富士登頂に成功した記事がのつており、毎年おそらく三十人の外国人が富士に登る記述されている。

（伊藤久子）

## ◆兆民辞世の書

奇才の民権思想家、兆民中江篤介が病床で揮毫した七言絶句である。

西風一夜、庭区を压す

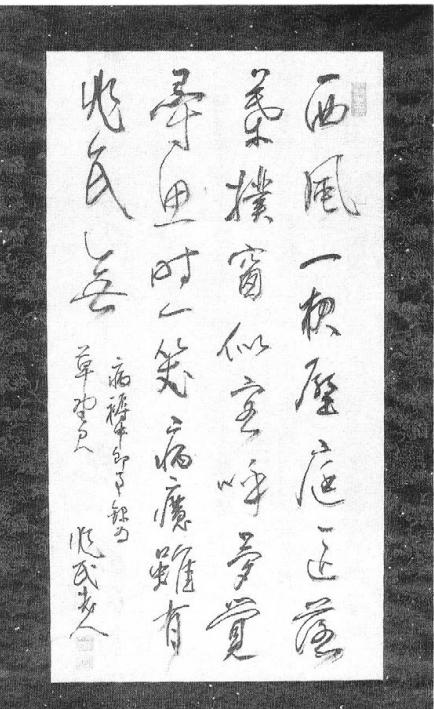
落葉窓を撲つ、客を呼ぶに似たり

夢覚めて尋思す、時に一笑

病魔有りと雖ども兆民無し

『中江兆民全集』に明治三四年一〇月二六日幸徳秋水、同二七日浅川範明と石黒忠憲、また杉田定一宛てほぼ同文の書が収録されている。解題には、死の直前、永別の記念に贈ったものとある。為書きの草野とは、草野新太郎。

『天正人名辞典』七年版によれば、嘉永四年、草野省吾二男として滋賀県に生まれ、明治四年大阪の春田基太郎塾に兆民らと共に仏語を学んだという。しかし兆民は、当時大学南校の得業生、四年末に司法省留学生として渡仏する。



兆民辞世の書 島方梅氏寄贈

二人の関係、春田塾とも未詳。草野は八年に北海道に渡り、物産・資源を踏査、のち鉄路でマッチ軸木製造業を起し、大正四年英國マクミラー社と軸木輸出契約を結ぶ。また樺太沿岸漁業にも従事、財をなした実業家である。兆民は、第一回総選挙で代議士となるが、「無血虫の陳列場」に身を置く能わざ辞表を提出、小樽『北門新報』に招かれて渡道、のち紙問屋、山林事業を営んだ。この北海道の林業で、二人は接点を持つたのかも知れない。

書は、両者のごく近しい間柄を物語る。が、『全集』に草野新太郎の名は出てこない。兆民は、揮毫して一月半後の二二月二三日、食道癌により五十五年の人生を閉じた。草野は、八〇才の天寿を全うし、昭和七年に歿した。本書は、草野の愛娘島方梅さんから寄せられた。

(佐藤 孝)

党に入り、星亨配下の自由党壮士として活躍、明治四年以後は東京府会議員・東京市会議員・浅草区会議員に選ばれ、さらに昭和三・七年には衆議院議員に当選した。発信の年は切手が切り取られているため確定できないが、

## ◆伊藤仁太郎（痴遊）の書簡

ても有名な伊藤仁太郎（痴遊）が、横浜市議の山崎小三（紫紅）にあてた書簡である。慶應三年（一八六七）横浜に生まれた痴遊は、少年の頃から自由

党に入り、星亨配下の自由党壮士として活躍、明治四年以後は東京府会議員・東京市会議員・浅草区会議員に選ばれ、さらに昭和三・七年には衆議院議員に当選した。発信の年は切手が

切り取られているため確定できないが、痴遊は明治四五・大正九・一三年の総選挙に東京第七区（浅草区）から立候補し落選していることや、封筒に鉛筆で大正一三年という書き込みがあることなどから、一三年五月一〇日の総選挙の後に書かれたものと思われる。落選したことや買収の実態などが報告され、選挙の貴重な証言を残している。

啓金指の件二付非常之御世話に相成、難有存候。此上とも宣布御尽力願上候。

小生又もや落選、何しろ買収一票卅円、幽靈投票五百以上、コレでは理想選挙にならぬ。いづれ面倒が起るでせう。宗教家の腐つたのはカボチャの腐つたのよりは始末が悪い。

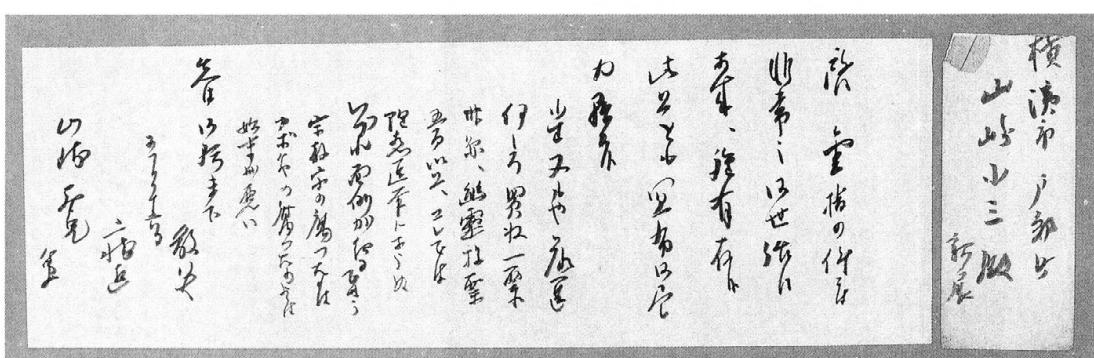
先は御願まで。

五月十六日

敬具

山崎老兄侍史

(吉良芳恵)



## 「横浜中華街」展余話

# 横浜華僑のルーツ——凌一族の軌跡

前回の「横浜中華街」展は多くの

方々のご参観を得、とりわけ中華街関係者より強い関心が寄せられた。そうした中で、山下町にお住まいの凌蔭堂氏より貴重な資料が寄贈された。そこでその資料の一部を紹介しながら、横浜華僑のルーツとして、凌一族の軌跡をたどりたい。

### 凌家の祖先

凌家には一族の歴史を克明に記録した「族譜」が存在する。それによれば、凌家のルーツは南宋の時代まで遡る。その頃、北方で勢力を伸した金の進攻

によって、宋は臨安（現在の杭州）に都を移し、凌一族もそこで暮らしていく。しかしやがて臨安も追われ、華南の地へと移動する。その南遷の過程で凌一族は福建省に入った凌成の一派と広東省に入った凌棟の一派とに別れる。それが一三世紀初頭のことである。そして凌棟の息子凌震は、広州都統摺広東制置使という高位の官職に着き、一族の繁榮を築いた。その後宋は滅んだが、凌一族は広東省番禺県潭村の名家として、元・明・清の時代を通して存続し、現在も同地には子孫が暮らして凌一族の廟も現存する。

### 凌一族のネットワーク

廣信祥はその後米の輸入から、ニッキ、ゴマ、鹿皮、馬皮、五倍子（黒の染料）、アンペラなどの輸入に転じた。アンペラは横浜から輸出される生糸の梱包材として多くの需要があった。ま

### 横浜を訪れる

初めて横浜を訪れたのは凌伯夷（凌蔭堂氏の祖父、号は芳田）と言われる。伯夷は同治二年（一八七二）八月二十四日、番禺県潭村に生まれ、長じてのち香港に出て酒屋の杏林荘で働き、その後主人とともに横浜を訪れ、当地に杏林荘を開いた。主人の帰国とともにない、凌伯夷は杏林荘を譲り受け、一八九六年、山下町一六四番地に酒・タイ米・中國米の輸入を行う廣信祥を開いた。廣信祥ではまた両替も行っていた。当時、サンフランシスコなどアメリカへ出稼ぎに行つた華僑は故郷に帰る際、横浜に立ち寄つて土産を買ふ者が多く、そうした華僑相手に米ドルと日本円との両替を行なつた。英語版の商工録ジャパン・ディレクトリーには、一九〇三年から一九三二年まで一六四番地に「KWANG SHUN CHEONG, Exchange」と掲載されている。

凌一族の名は、廣信祥の名前から来ている。現在も海産物商・雑貨商などが立ち並ぶ繁華な地区であるが、かつてここは南北行（南北の貨物を交易するの意）と呼ばれた商人ギルドが存在した。横浜の廣信祥は、こうした商品の原産地、加工地、販売地それぞれに張りめぐらされた一族のネットワークの中、貿易活動を営んだ。しかし、一九三七年に日中戦争が勃発すると、貿易は立ち行かなくなり、山下町内に所有していた不動産を切り売りしてしのいだが、やがて二代目凌國忠は香港に帰つた。その後幾多の困難を経ながら、も、三代目凌蔭堂氏は廣信祥を再興し、現在も祖父が横浜で店を開いた同じ場所で商売を続けておられる。

（伊藤泉美）



図2 廣裕泰の丸籐商標（凌蔭堂氏寄贈）

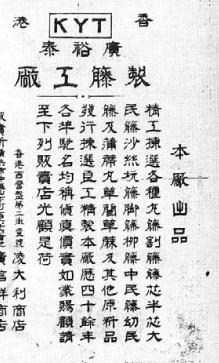


図1 廣裕泰のチラシ（凌蔭堂氏寄贈）

た廣信祥は籐家具の材料を香港から輸入した。図1はその当時のチラシである。香港の廣裕泰がインドネシアから籐の原木を輸入し、香港でそれを製材し、香港の凌大利、横浜の廣信祥、神戸の廣泰祥が販売した。いずれも凌一族の店である。廣泰祥は凌伯夷の弟伯通（号は廣田）が神戸に開いた店である。昭和四年の『神戸貿易業者名鑑』（神戸商工会議所）によれば、同店は一般雑貨を華南および東南アジア地域に輸出し、営業所の住所は図1と同じ、海岸通三丁目一三三番となつていて。香港の凌大利も凌伯夷の弟伯泰（号は春田）の店で、同店の所在地、西宮盤に現在も海産物商・雑貨商などが立ち並ぶ繁華な地区であるが、かつてここは南北行（南北の貨物を交易するの意）と呼ばれた商人ギルドが存在した。横浜の廣信祥は、こうした商品の原産地、加工地、販売地それぞれに張りめぐらされた一族のネットワークの中で、貿易活動を営んだ。しかし、一九三七年に日中戦争が勃発すると、貿易は立ち行かなくなり、山下町内に所有していた不動産を切り売りしてしのいだが、やがて二代目凌國忠は香港に帰つた。その後幾多の困難を経ながら、も、三代目凌蔭堂氏は廣信祥を再興し、現在も祖父が横浜で店を開いた同じ場所で商売を続けておられる。

# 横浜人物小誌

88

## 山口 定子

### 横浜育ちの新派女優

伊勢佐木町の入口に葛座という芝居小屋があった。座主は福富町の財産家斎藤調三郎、その意欲的な方針によって興行界の台風の目となり、明治二三年(一八九〇)八月二十四日に開幕した川上音二郎一座の成功は、新演劇勃興の重要な起点となった。翌月には石本一雄も上演、その一座から独立した山口定雄が東上した際も、二十五年の東京進出に先立つて葛座に出演している。長谷川伸の『よこはま白話』によれば、「山口はハマで最も人気のある書生役者」になった。『貿易新報』三九年一月二八日号によると、山口の一人娘定子は伊藤の養女となり、一〇歳まで横浜で育つたといふ。定子自身は「四歳の時に実母に別れた」と言っている。一九年生まれの定子が四歳といえば二三年頃、定雄が葛座に来演したのが二五年頃のことだから、この時養女になつたのではないか。伊原青々園『団菊以後』は、「長谷川伸君から聞いた話」として、定子は長谷川と同じ学校で、毎日お供つきで通学し、着物などもキラびやかなもので、まるで華族のお姫様のようだったと記している。

三三年に横浜で大火があった。斎藤は守札を身につけ、「葛座は焼けるものか」と舞台に頑張っていたが、猛火に

包まれて焼死したと伝えられる。他方、定雄は豆電球を散りばめた衣裳を使う電気仕掛け宙乗りという派手な演技で人気を得ていた。しかし、それが命取りになる。三五年に京都歌舞伎座で宙乗りの籠から落ちて足を損傷、三七年には函館巴座で公演中脳充血で倒れた。定子のもとに「父危篤」の電報が届く。定子は東京麻布に定雄を住まわせ、近くの月夜見教会に通つて病氣平癒を祈願した。みすぼらしい借家に寝ている定雄のもとに、憔悴した姿で定子がお参りから帰つてくるさまは、まるで芝居の一場面のようだつたとは、見舞いに行つた伊原の表現である。

祈願のかいあつて舞台に復帰する定雄を助けるために、定子は三八年七月函館巴座で初舞台を踏んだ。時に一八歳、孝行者がトレード・マークとなる。手足の不自由な定雄と怪我をしたところが仙台で今度は定子が発病、翌四〇年には加賀で火災に巻き込まれた。手足の不自由な定雄と怪我をした妊娠中の後妻八重、それに目の見えない定子が「手に手を取り交し身も浮く計り嘆きは死んでしまった」と。しかしこれは誤報だった。先に妻に逃げられ、自分は身体不適となり、この年の一〇月、信州飯田で定子死亡」の記事が出た。「先に妻に逃げられ、自分は身体不適となり、この年の一〇月、信州飯田で定子死亡」の記事が出た。「先に妻に逃げられ、自分は身体不適となり、この年の一〇月、信州飯田で定子死亡」の記事が出た。

杉浦善三『女優かがみ』より

定子は本望と思つて頑張り通したところが仙台で今度は定子が発病、翌四〇年には加賀で火災に巻き込まれた。手足の不自由な定雄と怪我をした妊娠中の後妻八重、それに目の見えない定子が「手に手を取り交し身も浮く計り嘆きは死んでしまった」と。しかしこれは誤報だった。先に妻に逃げられ、自分は身体不適となり、この年の一〇月、信州飯田で定子死亡」の記事が出た。「先に妻に逃げられ、自分は身体不適となり、この年の一〇月、信州飯田で定子死亡」の記事が出た。

杉浦善三の大正元年の著作『女優かがみ』には、横浜出身の女優として、白井寿美代・夢野千草・泉亀代子・木村重子・福田裕子・沢村薰といった人が紹介されている。明治四四年に帝国劇場で表彰された「第一等研究生佐藤浜子」も横浜出身だった。歌舞伎の市川九女八から新派の川上貞奴や芸術座の松井須磨子に至るまで、横浜は女優に相性の良い土地柄だった。女優の地位を確立するにあたつて、少なくとも横浜では、貞奴に匹敵する役割を果たしたのが山口定子であつた。

(前藤多喜夫)



山口定子

杉浦善三『女優かがみ』より

舞伎座で七回忌追善興行が行なわれ、「満都の同情は定子の一身に集まり、人気沸くが如く」と伝えられた。しかし、これは松竹名会社が定子の境遇を憐れんで企画したものだった。定雄の遺志を継いだ定子一座だが、人気は長くは続かなかつたようだ。横浜出身の講釈師伊藤痴遊によると、「つまりぬ下廻りと、いつか情交を通じ、旅から旅へ、さすらひの身となり、果は病を得て、いつ死ぬともなく、死んでしまつた」というのだが、これは少し先を急ぎすぎた下手な講釈のきらいがある。武田正憲の『諸国女ばなし』に、新派俳優名越仙左衛門のことが出ている。藏前高工を出て製鋼会社の技師をしていたという経歴の持主で、島村抱月門下の逸材中田正造の率いる剣劇團に属していた。その妻は山口定雄の娘で、幕内では「娘さん」と呼ばれていたといふ。

杉浦善三の大正元年の著作『女優かがみ』には、横浜出身の女優として、白井寿美代・夢野千草・泉亀代子・木村重子・福田裕子・沢村薰といった人が紹介されている。明治四四年に帝国劇場で表彰された「第一等研究生佐藤浜子」も横浜出身だった。歌舞伎の市川九女八から新派の川上貞奴や芸術座の松井須磨子に至るまで、横浜は女優に相性の良い土地柄だった。女優の地位を確立するにあたつて、少なくとも横浜では、貞奴に匹敵する役割を果たしたのが山口定子であつた。

## 資料よもやま話

# アフリカ軽装歩兵第三大隊

## 一横浜に駐屯したフランス陸軍歩兵部隊一

はじめに

幕末期の一八六一年（文久二）から七五年（明治八）にかけて横浜居留地防衛という名目で山手一帯に駐屯した英仏軍については、すでに展示（平成四年）や史料集『史料でたどる明治維新期の横浜英仏駐屯軍』（平成五年）などで紹介したが、その後も史料収集や研究をつづけている。

イギリス軍については駐屯生活を物語る写真や日記といったさらなる新出土史料によってかなりその輪郭がつかめてきていている。フランス軍についても少しづつではあるが進展してきている。ここではフランス駐屯軍のうち、陸軍であるアフリカ軽装歩兵第三大隊（3<sup>e</sup> Bataillon d'infanterie légère d'Afrique）について紹介する（以下）。

本来ならば一九世紀のフランス軍事史関係の文献にあたれば、かなりのことが明らかになるであろうが、いまだ搜查していないため、ここではフランス外交文書と海軍省文書をもとに、

『大百科事典』で得られた一八六二年ないし六四年頃にもっとも近い歩兵の構成は七〇年のそれであった。ちなみにその後は普仏戦争の敗北によつて大幅な兵制改革（七五年）を余儀なくされることになる。

当時の陸軍は、歩兵・騎兵・砲兵の三兵および工兵・輜重兵で構成されていた。そのうち歩兵は、第二帝政末期の一八七〇年当時、近衛軍（garde）と戦列軍（ligne）とに分けられた。前者は猟歩兵（chasseurs à pied）一大隊、アルジェリア歩兵（zouaves）一連隊、擲弾兵（grenadiers）二連隊、小銃手（voltigeurs）四連隊。後者は歩兵（régiment de ligne）一〇〇連隊、獵歩兵（légion étrangère）一連隊、外人部隊（legion étrangère）一連隊、アフリカ軽装歩兵第三大隊、憲兵（compagnie de discipline）七中隊で

ス山公園一帯）に駐屯した。三中隊のうち一中隊は来浜直後の七月に下関軍事行動に参加している。じつは、この部隊の来浜はこの時がはじめてではなく、前年の六二年九月には在日フランス公使館護衛兵としてすでに二〇名が姿をみせていて、これがフランス外交文書で確認できたのである。

本来ならば一九世紀のフランス軍事史関係の文献にあたれば、かなりのことが明らかになるのであるが、いまだ搜查していないため、ここではフランス外交文書と海軍省文書をもとに、『大百科事典』で得られた一八六二年ないし六四年頃にもっとも近い歩兵の構成は七〇年のそれであった。ちなみにフランスの代表的な百科事典であるラルースの『一九世紀世界大事典』（Pierre Larousse, Grand dictionnaire universel du 19<sup>e</sup> siècle, Paris: Administration du Grand dictionnaire universel, 1866-[90]) のコマッハム版（Geneve: Paris: Slatkine, 1982）によると、

「大百科事典」（La grande encyclopédie, Paris: H. Larivraut, [1886-1902]）の歩兵等の項目の記述を手がかりに、駐屯の部隊の実像にせまることを試みた。

当時のフランス陸軍歩兵の構成

アフリカ軽装歩兵が連隊を編成しない三個大隊であること（七月王政末期

アフリカ軽装歩兵が連隊を編成しなかった、獵歩兵（chasseurs）が別の部隊名に付されている」とがわかった。

「アフリカ」だけは同じで以下につづく言葉が「軽装歩兵」と「獵歩兵」と異なるこのふたつの呼び名が、はたして同一の部隊を指すものかどうかを確認することにした。

当時のフランス陸軍歩兵の構成で確認づくことによる、一八世紀前半までその起源をさかのぼることのできる部隊で、歩兵および騎兵の中から敏捷な兵が選りすぐられて編成された部隊だとある。

一九世紀半ばには軽装歩兵あるいは騎兵（軽騎兵のそれにはまさにchasseurs d'Afrique）という名称が付いていた。

「アフリカ」だけは同じで以下につづく言葉が「軽装歩兵」と「獵歩兵」と異なるこのふたつの呼び名が、はたして同一の部隊を指すものかどうかを確認することにした。

当時のフランス陸軍歩兵の構成で確認づくことによる、一八世紀前半までその起源をさかのぼることのできる部隊で、歩兵および騎兵の中から敏捷な兵が選りすぐられて編成された部隊だとある。

一九世紀半ばには軽装歩兵あるいは騎兵（軽騎兵のそれにはまさにchasseurs d'Afrique）といふことになる。

なお外人部隊とあるのは、映画「外人部隊」や「モロッコ」などで知られるフランスの傭兵軍のことである。あらゆる国籍の者たちから構成され、今日でも世界各地の戦場で戦果をあげているという。この部隊の創設は早く、一八三一年である。フランスのアルジェリア占領政策からうまれた部隊であるが、またメキシコやコーエチナにも遠征しており、フランス駐屯軍の実態がつかめないでいる時には、この外人部隊が来日した可能性もおつて

いた。しかし文書中に外人部隊の名前は見当らず、また当時の陸軍編成からみてもかれらが横浜に駐屯した部隊ではないことがわかつた。

さらなる別称、「アフリカ懲治隊」當時のフランスの中国・日本海海軍司令長官ジョーレス少将（Jaurès, contre-

amiral Commandant en chef de la Division navale des Mers de Chine et du Japon の報告書中に、あきらかにこの部隊を指していると思われるもうひとつの別称でくわした。アフリカ懲治隊(zéphyrus あるいは zéphyr[e]s)がそれである。

ラルース『一九世紀世界大事典』によると「アフリカで特殊中隊を形成する兵士らにつけた名前。兵士らは罷免とまではいかない軽罰に処せられた拘留者の中から採用されるもので、この名前はかれらの窃盜癖に由来したものである」。この言葉は「西風・そよ風・薄い服地」といった意味ももつてから想像するに、そよ風のように軽やかな、あざやかな手口で盗みをはたらく兵士らということであろうか。

しかし一方で、戦場でのかれらのはたらきにはめざましいものがあつた。同典はつづいてつきのようについている。「駐屯中に盗人であり、軍紀に違反し、放蕩者であればあるだけ、敵の砲火の前では勇敢で平氣でいられるのである。かれらを上手に使いこなす指揮官はめざましい戦果をあげている。かれらはアフリカにおけるわれわれの長い戦歴のなかでもっとも輝かしい諸エピソードに登場する。一八四〇年、アラブ人幾千人を向こうにまわしてマザグラン(Mazagran)の町を守つたのは一二三名のアフリカ懲治隊兵士であった。クリミア・中国・コーエンナ・メキシコでの戦闘にも名譽ある足跡をのこしている。今日の軍の上層部

はかつて、アフリカ軽装歩兵諸大隊の士官名簿中に載つた者たちである」。

以上のことから、アフリカ懲治隊とは、窃盜罪といった比較的軽い罪を犯された兵士を特別に編成した懲罰部隊であること、アフリカを主要な戦場とし、さらに中国にも遠征していることがわかった。そしてアフリカ軽装歩兵諸大隊とのあいだにつながりがあったこともうかがえた。この諸大隊のなかに懲罰隊が中隊として組み込まれたのかかもしれない。中国やメキシコへ派兵されたたるのは、一八六〇年代前半のことであろう。横浜駐屯のアフリカ軽装歩兵第三大隊の三中隊のいずれか、あるいは全中隊がアフリカ懲治隊である可能性が出てきた。そうであるならば、ジョレスが横浜駐屯のアフリカ軽装歩兵第三大隊をアフリカ懲治隊と言ひ換えているのも納得できるのであるが、定かではない。

「懲治隊」との関係

「」で言及する「懲治隊」(compagnie de discipline)とは、前述した一八七〇年時点での歩兵構成中に記載されているのである。かれらを上手に使いこなす指揮官はめざましい戦果をあげている。かれらはアフリカにおけるわれわれの長い戦歴のなかでもっとも輝かしい諸エピソードに登場する。一八四〇年、アラブ人幾千人を向こうにまわしてマザグラン(Mazagran)の町を守つたのは一二三名のアフリカ懲治隊兵士であった。クリミア・中国・コーエンナ・メキシコでの戦闘にも名譽ある足跡をのこしている。今日の軍の上層部

内部での通称)とすれば横浜駐屯部隊

が「懲治隊」である可能性も出ってきたのである。

「懲治隊」とは、ラルース『一九世紀世界大事典』によると处罚された兵士から編成された中隊(大隊であること)で、特別に厳格な管理のもと置かれ、骨の折れる任務につかせられたとある。あるいは「アフリカ懲治隊」と同様の懲罰部隊である。『大百科事典』によると、中隊はさらに銃中隊(compagnies de fusiliers de discipline)と植民地中隊(compagnies des colonies de discipline)に分かれた。

「前者はそう遅くないうちに戦列復帰を許されるという判決が下された軍人を対象とした。戦時に召集忌避したため有罪判決を下された志願兵を対象とする部隊でもあった。四中隊ありとする部隊でもあった。四中隊ありとユニジアとアルジェリアに駐屯し、歩兵に属した。

後者は懲罰および矯正手段の不足を埋め合わせるために創設された部隊で、アフリカ軽装歩兵諸大隊がその手段を提供していた。海兵隊(infanterie de marine)に属し、本隊はオレロン島(Ile d'Oléron ピスケー湾にうかる)に置かれた。この植民地懲治中隊にまわされるのは、六ヶ月以上の軽罰(禁固刑か)を受けた兵士や士官であつた。かれらがオレロン島にもどるようになるためには、最低でも一八ヵ月間、

横浜に駐屯したフランス軍部隊のひとつが、陸軍歩兵部隊であるアフリカ軽装歩兵三個大隊中の第三大隊に所属する分遣隊であり、アフリカ獵歩兵ともばれていたことが確認できた。

しかし別称から、実際の部隊は懲罰に処せられた兵士で編成された懲治隊である可能性がうまれた。そして該当すると考えられる部隊はアフリカで特別編成されたアフリカ懲治隊(陸軍部隊)と、懲治隊(海兵隊所属の植民地懲治隊)の二部隊である。しかし典拠とする文献が百科事典であるため、記述が信頼できる史料にもとづいたものであるかどうか、また問題となつてゐる一八六〇年代前半の部隊に関するものであるかは確証がなく、推測の段階である。今後の文献・史料発掘の中で確認していくつもりであるが、ご専門の方々からのご批判、ご教示等いただければ幸いである。

(中武香奈美)

## 閲覧室から

前回に続き、明治・大正期に横浜で発行された雑誌の複製のうち、当館で原誌を所蔵するものを紹介します。閲覧票で請求の上、ご覧ください。

**『横浜禁酒会雑誌』(横浜禁酒会発行)**

禁酒運動は、主としてキリスト教徒により、飲酒の害を取り除き、家庭や社会の風紀を改善しようとする運動で、アメリカで始まった。日本では、明治初年にアメリカ人宣教師J・H・バークレーラが禁酒会を結成し、横浜においては、明治一九年に横浜禁酒会が結成された。本誌はその二年後の明治二一年一月に刊行された月刊誌。内容は、論説、特別寄稿、叢書、家庭美談、雑録、内

外会報、本会紀事で構成されている。当館では、一号、三号、八号、一二号、一七号、一九号、二二号、二五号を所蔵している。(ただし、七号、八号、二五号以外は複製のみ所蔵)。

**『常磐』(美以教会女子伝道会社発行)**

横浜山手二六二番にあった美以教会の常磐社が明治三一年一月創刊し、女子伝道会社が発行した婦人向けの月刊誌。この雑誌は、キリスト教伝道と家庭知識の普及を目的としていた。内容は、火傷の手当、傷指の手当といった家庭知識のほか、カルカッタやヴェニスなど世界の漫遊記や、ヘレン・ケラー、菊地きく子等の伝記、伝道彙報がある。

当館では、特別号、一卷一号、二卷

六号、三卷一号、三卷一二号、一四卷一二号、一五卷二号、一五卷五号、一五卷八号、一五卷一〇号、一八卷三号、一九卷一号、二二卷一二号、二三卷三号、二三卷五号、二三卷一二号、一三号、二三卷一二号、一二号を所蔵している。

小島久太(鳥水)、今井幸吉、原田久太郎が萤雪会として発行した月刊誌。

この雑誌は、螢雪会規則にもあるよ

うに、文学及び実業に関する事項を記載している。小島久太が、當時読売新聞に連載された「明治豪傑もの」がたりにならって掲載した「近世豪傑物語」等も入っている。

当館では、二卷一号(明治二四年一月)、一三卷四号、三卷六号、一三卷一〇号を所蔵している。

横浜市野毛町二丁目四五番地にあつ

た春潮社が発行した月刊の文芸雑誌。内容は、小説、詩、俳句、雑録、社報などでしめられる。横浜を舞台にした読み物がいくつもあり、雑録には、花和尚著「横浜の新聞記者」や白翁著「昔話」などが掲載されている。また、五号の時報には、毎号口絵に写真を載せており、権山敬吉、「横浜通信」の日比野重郎等が設立した横浜写真会の会員と入会案内ものせている。

当館では、三号(明治三五年七月)

一五号を所蔵している。

(上田由美)

### 閲覧室からのお知らせ

閲覧室の図書整理のため、2月28日(火)～3月3日(金)の4

日間、閲覧室を休室とします。ま

た月末整理日のため、3月31日(金)も休室となります。

(上田由美)

●前号でお知らせしましたように、昨年10月6日、昭和56年6月を達成しました。

閲覧室からのお知らせ  
閲覧室の図書整理のため、2月28日(火)～3月3日(金)の4日間、閲覧室を休室とします。また月末整理日のため、3月31日(金)も休室となります。

## 資料館だより

### ▼展示



「館蔵資料展—横浜の近代—P A R T II」2/1~4/23 開港期から明治・大正期にいたる横浜の歴史を、横浜開港資料館所蔵の、その時々の姿を表現する特徴的な資料によってあとづける。あわせて新収資料も紹介する。

（複製）明治44年3月撮影 一点（青）

（1）記念絵はがき三枚一組 (中区山下町聘珍楼) (南区南太田町) 増田好夫氏)

（2）山高帽子（箱とも） 一点 長久舎ミルクホール新年チラシ 一点 (港北区大曾根) (澤木美氏)

（3）関東大震災写真絵葉書 一点 (浦和市別所 稲村徹元氏)

（4）ハインド横浜英語学校幼年科生徒集合写真（複製）明治41年5月撮影 一点（尋常吉田小学校卒業生集合写真） (山下町 増田平氏)

### ▼寄贈資料

葉区あざみ野 田中哲夫氏)

（5）『時計心得草』『時計心得草』翻刻 (文明開化期当初における横浜の風物と事情) 各一点 (保土ヶ谷区西谷町 江口茂氏)

（6）「非常措置に基づく留日学生移動証明書」「山下町1664番地土地貸借一件書類」廣泰裕商標及チラシ（複製）各一点 (中区山下町 凌蔭堂氏)

（7）「常磐」(美以教会女子伝道会社発行)

（8）「常磐」(美以教会女子伝道会社発行)



物部館長から花束を受ける100万人目の入場者白木和幸さん(東京都大田区立大森第3中学1年)